

# 玉八商店(玉八紙店)

長浜市大宮町5-12  
TEL 0749-62-0296

西田天香の実家―元禄から続く老舗―



▲「玉八紙店」看板



▲西の「離れ」地下の船着き場



▲「近国農商工便覧」西田八重郎商店

玉八商店(紙店)の先祖は、浅井郡弓削村(長浜市弓削町)の藤森家である。藤森忠八が寛文8年(1668)に長浜町へ移り商売を始めたのが店の草創とされる。2代目の忠左衛門は、元禄8年(1695)の『大洞弁財天祠堂金寄進帳』にも、その名が片町の住民として見える。安永元年(1772)に船町の沢屋こと西田佐小右エ門の実子・忠介が、その藤森忠左衛門の養子となり家を継ぐことになる。この時、忠介が実家の姓も相続し、玉屋西田忠介と名乗った。

「玉八紙店 創業寛文八年」と大書された正面の看板の下をくぐって、現在の当主で忠介から9代目となる富太郎さんに話を聞いた。「いや、昔のことは分からないのですよ」と言いつつ、西田家の由緒を7代目の西田憲蔵氏が昭和44年(1969)3月にまとめた家系記録を渡された。この家系記録に、冒頭に記した創業の話などが載っている。

西田家からは、明治から昭和にかけて活

入る船着場も残っている。鮮魚を仕入れたのであろうか。

『便覧』では、西の「離れ」は酒売場であり、大手通を隔てた北側も店で、屑物屋であったとある。江戸時代の料理屋から職種を変えて、明治の初めには乾物を売っていたように、多角的な商売を行っていた。同書の絵を見ると、看板にある蠟燭も販売していたようで、酒店や屑物屋西の倉庫には酒樽が描かれ、それらを車に乗せて運ぼうとする人が見える。屑物屋は今で言うリサイクルショップである。『便覧』にも引き札にも、丸に「中」の文字の商標が見られるが、これは現在使用しておらず、「中」の意味も不明という。玉八の屋号も初代の



▲富太郎さんと奥様、それに秀吉人形(右)、加藤清正と従者の人形(手前左)

躍した思想家・実践家の西田天香が出ている。天香は4代目の西田八重郎の長男だったが家を継がず、町の有力者・河路重平に従い北海道開拓へ向かい、経済的破綻を経験した後、「無一物」の求道の生活に入った。家は養子の5代目八重郎が継いだ。その他、7代目の西田富蔵の長男・亮三は、滋賀県立彦根中学校を経て、昭和8年(1933)に浜松高等工業学校電気学科に入学、のちに静岡大学教授となり真空管の權威となった。西田家は富蔵次女・よしに養子を迎える。その長男が、現在の当主・富太郎さんである。

玉八商店は明治22年(1889)に発刊された『近国農商工便覧』(以下、『便覧』)に、その店頭が描かれるが、西田八重郎として「諸紙・乾物・絵之具」を扱っていた。さらに、明治29年(1896)の引き札が、長浜城歴史博物館が持つコレクションに含まれる。ここにも、「諸紙・乾物・絵之具 降并二小売」とある。

これによると、明治の20年代には西田家は基本的に紙屋であったようだが、それは料理屋であったと伝承されている。料理屋の名残として、店の西側片町の通りを隔てた「離れ」に、料理を本宅から「離れ」に運ぶための2階通路(橋状)の痕跡や、「離れ」の地下には直接米川から船が

忠介の時代から使っているが、「玉」の意味は不明である。

「何か自慢のお宝はないですか」とお尋ねした所、ご当主が蔵から高さ30センチほどの秀吉の人形を出してきてくれた。「大阪の親戚から頂いたと聞いています」。箱書きからすると明治29年(1896)に6代目の半治郎の長男・勇太郎が生まれた祝いとして贈られたものようだ。他にも、加藤清正と従者の人形も伝わるので、あるいは「地震加藤」を表現したものかもしれない。実は半治郎の弟が、大阪南本町の親類・西田藤吉家を継いでいる。秀吉人形も西田藤吉家からの贈物だろう。350年続く長浜最古級の老舗。一品一品に深い歴史がしみ込んでいる。(太田浩司)

※地震加藤：地震の際、加藤清正が秀吉の身を案じて伏見城に駆けつけたという内容の歌舞伎

## この一品 手染めの友禅紙



最近、外国人観光客が多くなり、浮世絵の友禅紙の手染めがよく売れるという。西洋の印象派にも影響を与えた北斎のデザインは、時代を越えて万人に受け入れられるようだ。